No. 83
1988.
9. 30

岐阜の博物誌

編集兼発行
〒501-32 関市小屋名（百年公園内）
岐阜県博物館内
岐阜県博物館協会
TEL 0575-28-3111(代)
振替 名古屋6 37909

地域性豊かな文化.芸術の創造を

県芸術文化会議会長　金 神 徹 三

ぎふ中部未来博会場の片隅に「芸術文化の森」をつくり、県芸術文化会議が、建築研究会の若者たちに呼びかけ共催で野外展覧会を開きました。

その若者たちは、「時間 一器」をテーマに50センチ四方の透明なボックスに入る作品を展示したり、地方作家のオブジエなど、この森にふさわしい労作がならび、実に大勢の創造者たちが手弁当で知恵と汗を流し、そのエネルギーに感動しました。

大成功の中部未来博、日本国中にひびきわたり、岐阜地域も湧きに湧いている。

県芸術文化会議は、芸術、文化の振興に各方面のイベントを主催、共催、後援等、実に様々な文化活動、行事、事業に取組み、活躍していますが、この「芸術、文化の森」もその普及に理解と創造力の考え方に沿って催したものでした。

「地方の時代」といわれて随分たちました。近代化後の成熟期の中にあるニッポンにとっては、中央集権のデメリットな部分が顕著になり、実質的な地方分権の変革が速度をはやめています。しかし、真の分権とは、単に権力の分散だけではありません。むしろ「地域の思索」が大きな問題だと私は考えます。

「地方の時代」＝「地域の思索の時代」の意味するところは、色々理解の仕方があるでしょうが、地域住民の幸福（精神的な意味においても）をまず第一に考え、そこから各種の政策を考えていくのが順当だと思います。

文化は与えられるものでなく、自らの意志と努力で創造していくものであり、行政によってつくられていくものではありません。地域住民と行政が一体となってこそ、豊かな地域文化が花開くものだと思います。

行政の全分野を、文化的視点から見直して個々の施策の中に文化性を積極的に投入していくー この姿勢が固定されるよう私は切望します。

私ども県芸術文化会議の目標は、地域性豊かな文化、芸術の創造にあり、そのための活動が岐阜県民自身の文化水準を高めていくためにも役立っていると自負しております。

思えば富国強兵の思想から、文化は非生産的であるというイメージが生まれ、ここからムダ使い、ゼイタク、柔弱亡国のイメージが発生しました。しかし、文化とは純粋芸術から広く生活文化を含め、人間が営む人間らしさ、生活者としての在り方が現代より未来にかけて絶対に必需品となってきているのです。

行政も経済も一般社会も、直接利益につながらない遊び心にも目を向け、芸術的、文化的にカネを使う情熱がなくては、豊かな人間性の回復などたとえ言ってみても空転にすぎません。

ぎふ中部未来博は、こうした大イベントに豊かな人間形成のため芸術、文化こそ絶対に必需品である理解のもとにたとえ片隅の一部であるにしろ場所を無料提供され創造者たちに柔軟な遊び心の創作を発掘出来る機会をあたえてくれたのです。

地域文化の発生こそ、こうした官民一体となった関係各位の理解により創造原点となり素晴らしい作品群が生まれ出た実感を味わったものです。

調査研究

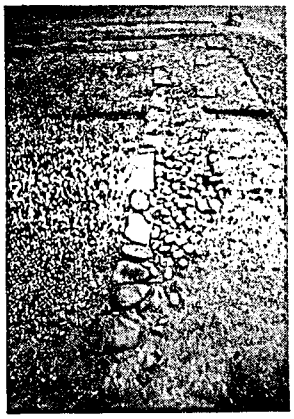
史跡高山城跡（その2）

高山市郷土館　学芸員　谷畠博之

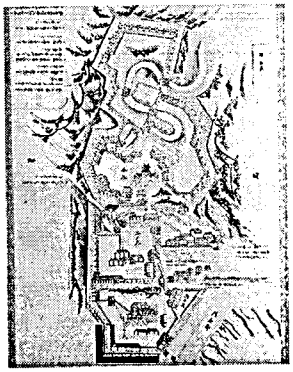
高山城の前身は、近江の守護で、飛騨の守護を兼ねた佐々木氏の被官であった多賀氏によって築かれ、本国の多賀天神を祀っていたことから天神山城と呼ばれた。永正年間には高山外記が在城し、のち三木自綱に滅ぼされ、三木氏の嗔城となった。天正13年金森長近はこの三木氏を滅ぼし、翌天正14年豊臣秀吉より飛騨一国を賜った。長近は天正16年からこの天神山に築城を開始し、慶長8年まで約16年かかって完成させた。高山城の各曲輪は、本丸が東西57間に南北30間、南之出丸が東西15間に南北22間、二之丸が東西77間と南北84間、三之丸が東西120間に南北93間の広さがあった。

金森家は元禄5年まで、約107年間飛騨を治めたが、その間の高山城に関する記録はほとんど残っていない。ただ、寛文3年と延宝4年に、城の修復のために幕府に提出した図面の写しが多く残っている。この内寛文3年の絵図は、前年の5月1日の地震による石垣破損の修復願いで、この時は中部・近畿の多くの城で被害があった。また延宝4年の絵図は、前年8月12日の大雨による石垣破損の修復願いで、その他の記録はまったく残っていない。

元禄5年の金森家の転封後は金沢藩が高山城在番を勤めたが、この間の記録は多く、現在知られる高山城の本丸、二之丸等の平面図はこの間に作成されたものと見られる。のち元禄8年高山城は破却となり、以後城跡は序々に公園化され現在に至っている。高山城跡が初期の様式を伝えているのは、幕末まで存続せず、この時点で歴史に埋れたこともその一因ともいえる。



本丸屋形礎石



高山城絵図（延宝4年）

金森長近は、飛騨へ入る前は越前大野、また関ケ原合戦後は美濃上有地を領したが、それぞれ大野城、小倉山城を築城している。また、長近の養子司重も飛騨古川に増島城を築いているが、これらの諸城は金森氏の築城の特色ともいうべき共通点が多い。まず城の場所は、それまでの領主の城に入らず近くに城地を定めて築城している。（戌山城→大野城、松倉城→高山城、蛤城→増島城、蛇尾山城→小倉山城）。また城下町はまったく新しい場所に城側より一番町、以下幾筋かの大通りと、それをつなぐ横丁からなる町割があげられる。大通りは大野が五番町まで、高山・増島が三番町まで、上有知が二番町までと、年代が下ると数が少なくなっているが、呼名はいずれも何番町であり、町の中央の横丁を中心に上町と下町に分けられている。また、武士と町人の居住区がはっきり分けられ、身分の区別をはっきりさせるといった政策もとられているが、特に武家地に対して町人地の割合が高い。これは商工業の発展に力を入れた町づくりの現われであり、石高が大きくても米が主産物であった平野部の領主に対して、金森氏の領地は石高の割に広大な領地をもち、諸産物の集約が可能であったこともその一因と考えられる。その他市場の用地のため道幅が広くとられたことも共通しており、当時の道幅のまま現在に至っている所も多く、このことからも長近の卓越した技量がうかがわれる。

参考文献　高山城跡発掘調査報告書Ⅰ・Ⅱ

館・園紹介 No. 70

大垣市郷土館

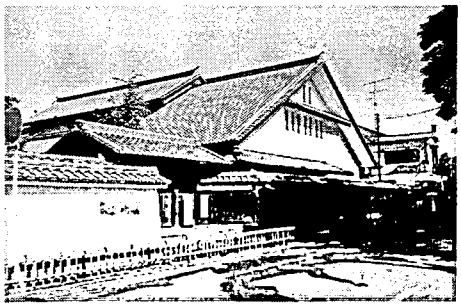
〒503　大垣市丸の内2丁目4番地
TEL 0583-75-1231

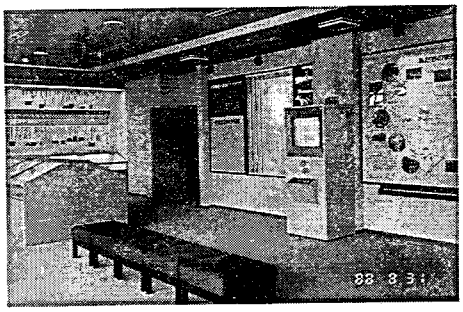
大垣市郷土館は大垣城の西に位置する。昔から"水の都"として知られていた大垣であるが、郷土館の近くにも水門(すいもん)川、という川が流れている。この川沿いの遊歩道を歩いていくと、水草の間を悠々と泳いでいく鯉を見ることができる。町の中というのに、ここでは時間はゆっくりと流れていく。

昭和60年は、戸田公が大垣の藩主として大垣城へ入城して350年目にあたる年であった。そしてこの年、戸田公入城を記念して、この大垣郷土館は建てられたのである。そのため、館の正門と船板塀は、旧戸田邸のものがそのまま使われている。館の建物自体も、その門と塀にマッチした日本家屋風のモダンな建物である。そのせいか、郷土館は町並に自然にとけこんでいる。

門から一歩中に入ると日本庭園があり、その奥には、大垣市の市花であるサツキの盆栽が並べられている。ここにある盆栽は100年もたった立派なものばかりで、郷土館にはこの盆栽の手入れをされる専門の方がいるくらいである。

建物の中に入ってみる。建物は2階だてで、1階部分には戸田公顕彰室・郷土美術室・郷土歴史室があり、2階部分には画廊・和室がある。





戸田公顕彰室は、大垣と大垣の藩主・戸田家に因むものが展示されている。片山館長のご説明によれば、代々の藩主の務めは、治山治水と新田開発、つまり水とのたたかいであった。ロビーにある城郭模型からも、豊かな水の都であると同時に、水災に立ち向かわねばならなかった都市の姿が見えてくる。

顕彰室の隣りは郷土美術室になっていて、大垣の先人の作品を展示したりしている。8月から9月は、日本画の奥富實年の作品展で、これは郷土画家をほりおこすシリーズの1つである。片山館長は、あちこちに散らばって所有されている絵を探す苦労を語って下さったが、そのかいあって、絵だけでなく、實年自作の落款や細工物、そして写生帳なども置かれており、充実した展示となっていた。

また郷土歴史室では、毎年夏休みに子供郷土学習教室が開催される。今年は大垣の古墳や美濃路についてなど、4つの学習教室が開かれた。美濃路の学習教室では、郷土史家の方が紙芝居を使ったり、指を年表に見たてたりするなどのユニークな方法がとられた。これからもこの学習教室を続けていきたいと、片山館長は意欲的に語って下さった。

大垣市郷土館の休館日は、月曜の午後と火曜、祝日の翌日(祝日が日・火曜の時はその翌日)、及び年末年始である。開館時間は9～17時で、入館は16時半で締切。入場料は中学生以上は100円、小中学生は50円。割安になる大垣城との共通入場券を利用して、郷土館で歴史について学んだ後、大垣城から町を一望することも。

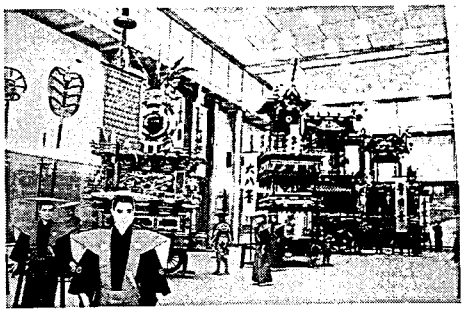
(内藤記念くすり博物館　稲垣裕美)

高山屋台会館

博物館相当施設として新館オープン

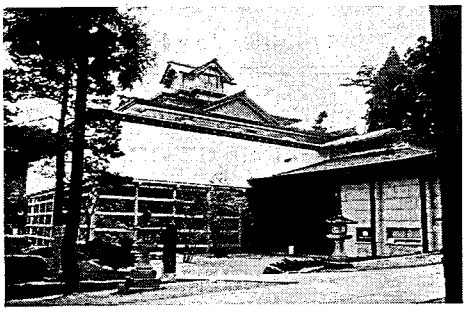
収蔵環境への配慮と資料展示室．研修室の設置

日本三大美祭のひとつに数えられている高山祭、その主役である屋台（山車）を展示し、多くの人々に見ていただこうと昭和43年に開館致しました。それ以来、全国のこうしたたぐいの施設の先駆け的存在として、又公立ではなく民間の経営（宗教法人の教化活動の１つとして）という点でも常に注目されて参りました。２０年たった今、他の施設に比べて屋台の保存管理という点で必ずしも良好とは言えませんでした。そこで従来の観光的施設から博物館相当施設として内容の充実を図る為にも万全の設備が必要であるという機運がもりあがり新会館建設の運びとなりました。



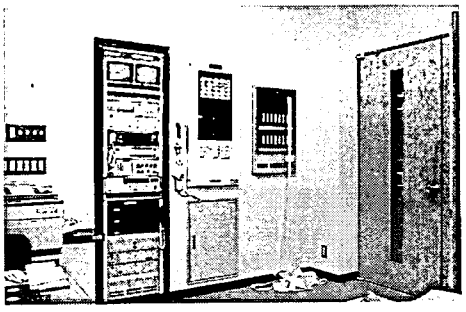
開館以来顧問をお願いしております環境工学の権威であり、“蔵”の研究で有名な名古屋工業大学名誉教授の宮野秋彦氏の御助言や文化庁の技官半沢重信氏の御助言御指導のもとに、屋台の保存に最適である屋台蔵に最も近い収蔵環境を目ざして、神社の関係機関の度重なる検討の結果、設計は国立能楽堂や伊勢神宮内宮神楽殿等手掛けられた工学博士であり、和風建築の権威である大江宏先生、施工は間組に依頼しました。

内容的には従来の屋台の展示室に加え、神社の宝物、屋台に関する資料等の展示室、研修室を兼ねた視聴覚室（常時、祭のビデオを上映する）等も設け、資料の収集、整理保存、そして

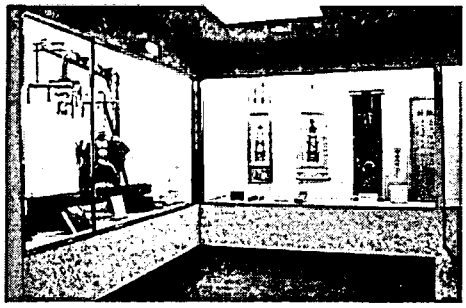


調査研究の成果を地域住民や観覧者に提供するといった教育普及活動の一端を担う博物館本来の目的に添うべく、屋台組、氏子と職員が一丸となって資料収集等に努め博物館相当施設として、今確かな一歩を踏みだしました。

なお設計設備には特に工夫が凝らされ、屋台をより良い環境で保存できるよう温度湿度はもとより照明等にも細心の注意が払われております。屋台の保存と一口に申しましても、木、漆、布、金具類と多種多様な素材から成り立っており、保存という面で、とても扱いにくい代物です。例えば彫刻等にひびが入らない様にと湿度を高くすれば、知らない間に幕等の布類にかびが生えていたり、結果論では当然の事ながらそうした失敗をくり返しつつ、試行錯誤の末、温度22～23℃、湿度65～70%、これが屋台にとって最も良い環境であり、まして寒暖の差の激しい高山で四季を通じてこの状態を保つ屋台蔵に



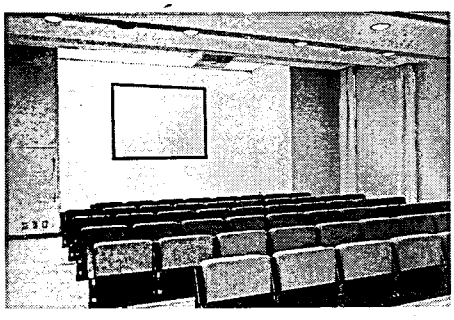
近づくために各室内と外部（外気）との間に十分な空気層が設けられ、この空気層を空調することによって屋台の保護を行う間接空調がなされており、対象はあくまでも収納される文化財（屋台）であり、観覧者用の広い通路は屋台展



示室に対しての空気層と考えられ、幾重にも折り重なっている日本的佇いの屋根がつくりだす空間は一見無駄のようですが、それも各室の空気層と考えられ、合理的な設計がされています。

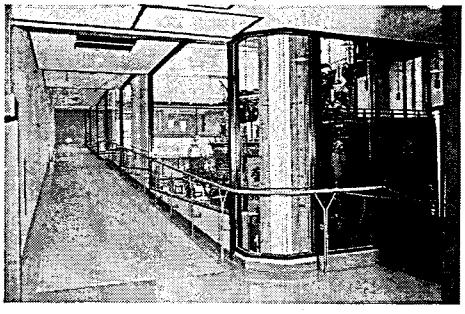
また湿気対策としては、床、壁、屋根の至る所に木繊セメント板が敷き詰められており、屋台展示室はさらにその上に従来調湿効果という点で最高とされる杉にも優る調湿性ボード（旭ガラス、ミュージライト 25㎜厚）が貼られており、又屋台の乾燥が心配な時の為に、展示室の内側の回りに石が敷き詰められ、その部分に水分を補給できるように設計されており、さらに乾燥が進む時の為に地下に水を張るようにタンクが設けられ、万全の湿度対策がなされています。

また直接空調をしていない屋台展示室、収蔵庫内の温湿度は室内温湿度計測設備によって、屋台展示室、収蔵庫、資料展示室等館内10ケ所



のデータが1時間毎に事務所内の記録紙に弾きだされ、各室内の温湿度分布、1日の温湿度変化、年間の温湿度変化等を全て把握できるようになっています。

文化財の保護という点でもうひとつ忘れてならないのが褪色防止ですが、旧会館が屋台の幕等の色褪せを防ぐためにとても暗かったのに比べ旭ガラスの熱線吸収ガラス（30～40％程度吸収する）や三菱樹脂ハローウインドウ（ポリエステルフイルムを貼ってあり、熱線吸収とともに紫外線99％カット）を使用し、明かり取り窓から外の光もとり入れ、とても明るくなっています。また屋台展示室や資料展示室に使われている蛍光燈は全て紫外線遮蔽率99％のナショナル演色ＡＡＡを使用し、さらにルーバーや障子で照明を和らげる工夫がなされています。（間接照明）



また来館者への配慮として天井高10ｍの屋台展示室を下から上まで全てガラスで囲むことによって屋台の屋根の先まで見えるように設計されており、また旭ガラスのミュージアムガラス（10㎜）の使用により屋台がより一層美しくみえるようになっております。

1階にエントランスホール、2階にエキジットホールを設け、この上下の空間を螺旋（らせん）状の廻廊をもった屋台展示室でつなぐ完全なワンウェイの動線計画の構成が考えられており、この螺旋状の廻廊（スロープ）の採用により屋台をいろいろな高さから隈無く眺めることができるよう奇抜な発想の転換がなされております。

是非一度ご来館の上、ご意見ご感想を伺えたら幸いに存じます。（高山屋台会館　水口登美子）

第37回公開講座報告

奥美濃しろとりの祭り

――― 白山信仰宝物展・姫神コンサート ―――

今夏、白鳥町は燃えていました。「新たなる観光資源を創る。活力ある地域連帯づくり。伝統芸能の伝承」の3点を目的・意義とした「奥美濃しろとりの祭りサマーイベント」が8月5日～7日の3日間、町を挙げて行われたからです。地域を活性化させようという町民の熱意で「白山の文化と歴史と芸能」にスポットをあて、岐博協第37回公開講座、白山信仰宝物展、姫神コンサート等が開催されました。

1. 第37回公開講座

「中世に起源を発する民俗芸能」伊東久之氏

とき　S 63. 8. 6 (土)

ところ　北濃小学校体育館

今年度2回目の公開講座は、中・北濃地区の担当で、準備の段階から各方面と連携を密にされ、白鳥町公民館大会と共催の形で行われました。郡上八幡町文化財保護協会の関係者30名、さらに飛騨・西濃地区からも参加者があり、総勢230名に達し、最近にない大盛況でした。

岐阜大学助教授伊東先生は、姫神コンサートの中で平泉の毛越寺(もおつじ)と白山長滝神社の延年が共演されるが、こうしたことは初めてのことで、大変興味があると強調され、その見どころ等も加えて次のように話されました。

延年・風流(ふりゅう)・能・狂言・猿楽が中世芸能の核である。その中で、延年はめでたい芸能として中央で演じられていたが、やがて中央では能が主流を占め、そのため延年は消滅していき、地方でしか見ることができなくなった。現在、平泉の毛越寺、長滝神社、日光の輪王寺の3か所しか残っていない。輪王寺は一曲しか伝わっていなくて、国指定の重要無形民俗文化財は毛越寺と長滝神社の延年である。毛越寺の「若女の舞」に注目したい。

講演を聴いて、コンサートで上演される「日本二大延年の舞」に一層感興が高まりました。

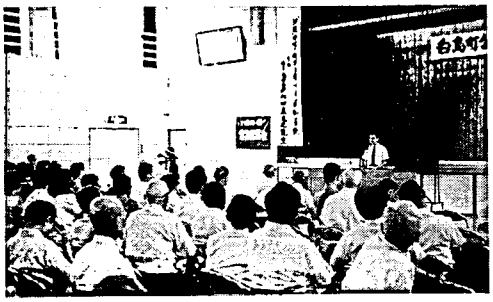
2. 奥濃越白山信仰宝物展

公開講座終了後、「奥濃越白山信仰宝物展」を拝観見学しました。宝物展は、龍宝殿、長滝寺、若宮修古館、歴史民俗資料館さらに石徹白(いとしろ)地区の大師堂、白山中居神社で行われていました。

白山長滝は、「奥美濃の正倉院」と呼ばれるように国・県指定の重要文化財が数多く残っております。鎌倉・室町時代、白山信仰は全盛期でした。この期には神社仏閣30余宇・六谷六院満山衆徒360坊といわれました。その勢威を示すかのように信者の手によって寄進された、鎌倉・室町時代の秘宝がたくさんあります。

木造四天王立像（県重文、鎌倉－南北朝時代）の精巧な彫りが印象に残りました。また、絵画・工芸品も鎌倉・室町・江戸時代の作品が多く、保存状態がよいせいか色鮮やかでした。鑑賞する時間が短くて残念なことでした。

歴史民俗資料館には、宝物のほか、遺跡・古墳からの出土品や、宝暦の農民騒動の史料、のこぎり・木馬(きんま)などの山樵用具(さんしょう)さらに民家・杣家(そまや)などが移築されており、昔の山村の生活を知ることができ、大変興味深いものでした。



公開講座

歴史民俗資料館

若宮修古館は、長滝神社の社家で、約1250年前から宮司として奉職し、当主は40代目にあたるそうです。母家は天明5年に建てられ、県の重要文化財です。ここにはおびただしい数の壷があります。これは諸国の人々が神前に酒を供えて祈った、いわば「庶民の心」ともいうことができるでしょう。この酒器だけでも一見の価値があります。なお邸内には、谷崎潤一郎の名作「細雪」の舞台となった爛柯亭があります。谷崎氏の手紙、色紙等も保存されており、庭園と調和して静かなたたずまいを見せております。当日は中を見学できず残念でした。

石徹白地区の大師堂・白山中居神社の宝物も重要文化財が多く心引かれましたが、時間がなく拝観見学できませんでした。

3. 姫神白山夢幻奏

—「姫神」白山長滝神社コンサート—

「奥美濃しろとりの祭りサマーイベント」は、姫神白山夢幻奏 —「姫神」白山長滝神社コンサート— でクライマックスに達しました。

8月6日夜、白山長滝神社の拝殿で姫神白山夢幻奏が開かれました。長滝神社と岩手県・平泉の毛越寺に伝わる日本二大延年の舞（ともに国重要無形民俗文化財）が千年余の歴史の中で初めて共演し、それに姫神のシンセサイザーが加わったコンサートに3500人の観客が魅了されました。

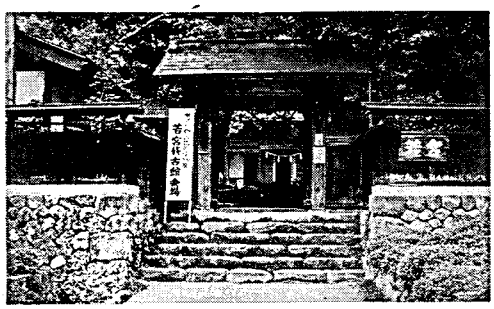
「姫神」は、シンセサイザー奏者星吉昭さんのグループで、NHKの「ぐるっと海道3万キロ」のテーマミュージックでも知られています。星さんは、演奏のあいさつで、藤原秀衡が寄進した仏像を永年護ってきた白山長滝の人に感謝の念をもって、「勤めさせてもらいます」と言われました。その言葉のとおり、演奏には、星さん、姫神の全身全霊がこめられていました。私たち観客は、その熱演に引きこまれて、しばし中世ー幽玄の世界にひたりました。

コンサートの始まる前に清めの雨が降り、やがて夜のとばりが老杉のこずえから下りてくると、神域は厳粛な空気になり、午後7時、コンサートは、長滝の延年「たうべん」の奉納で開幕しました。笛や太鼓のはやしにひなびた歌がのり、氏子や稚児が素朴な舞を奉納します。「露払い」、「乱拍子」、「田歌」、「花笠ねり歌」、「たうべんねり歌」と続きますが、単純な舞、歌の中に敬虔な祈りを感じます。この延年は毎年1月6日の「六日祭」に奉納されます。

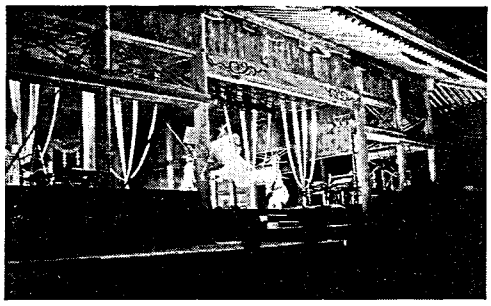
この後、姫神のシンセサイザーに移りました。さまざまな光が交錯し、舞台を浮かび上がらせ漆黒の闇に映えて幻想の世界に誘われます。曲は、「水光る」、「杜」、「蛍」、「白鳥伝説」、「星が降る」等と続き、それは土着的で清澄な世界をイメージしたものです。素朴な東北の風土と豊かな白山とオーバーラップした世界が奏でられていきます。

感興が高まる中で、石徹白小学校全校児童と母親らによる童歌が歌われました。ふと現実にもどった感がしました。その後、毛越寺の延年「若女」の舞が続きます。白装束の若女は、右手に鈴、左手に扇を持ち、一人静かに優雅な舞を奉納します。柔らかな動作と澄んだ鈴の音が会場を魅了しました。やがて、若女は、長滝の宮司に伴われて神前の方へ退場しました。

フィナーレは、星さんのオリジナル曲「大地燃ゆ」と「清浄白山」でした。アンコールの拍手に応えて、さらに2曲演じられ、2時間に及ぶコンサートは、観客の心に、音楽のすばらしさ、古典と現代の調和、さらに白山長滝の美しさを残して終わりました。（事務局　清水廣美）



若宮修古館



姫神コンサート

研修委員会より

昭和63年度総会におきまして、従来の会員研修会は本年度から専門委員会組織になり、一層発展的な活動をすることになりました。

この会員研修会を計画するにあたり、今回、協会の長期展望に立った各館．園と協会との在り方をさぐるための実態調査を行い、それをふまえ、会員研修会を企画することになりました。

アンケート実施にあたりましては、いろいろご協力下さいましてありがとうございました。その結果につきましては、後日報告させていただきます。

本年度の会員研修会は以下のとおりです。

昭和63年度 会員研修会日程

	期　　日	内　　容	会　　場
第 10 回	11月11日 (金)	・展示資料のディスプレイ ・アンケート集約結果について ・博物館協会の歩み	岐阜市歴史博物館
第 11 回	12月4日 (日) ～5日 (月)	第1日目；大垣市を例とした地域博物館のあり方 助言者　廣瀬　鎮氏 第2日目；博物館見学	西濃地区 会場及び宿泊先は交渉中
第 12 回	2月15日 (水)	・白黒写真の撮影と現像焼付 （定員 15名）	岐阜県博物館

詳細は後日連絡します。

◉東海三県博物館協会 交流研修会案内

8月に案内しましたが、第13回東海三県博物館協会交流研修会には、60余名の参加申込みがあり、盛会になるものと期待しております。

期日　昭和63年10月18日(火)～19日(水)
会場　海津町高須　　海津町文化センター
日程　10月18日(火)
　13:00～15:30　研究協議
　　テーマ「各館の現状と課題」
　　事例発表 ― 各県協会代表1名
　15:30～17:30　講演　海津町長
　　伊藤 光好氏
　　テーマ「宝暦治水と近代の治水」
　18:00～20:00　懇親会（於：海津苑）
　10月19日(水)
　9:00～12:40　見学（バス）
　　福原輪中、船頭平公園、治水神社、中央水郷地区センター、高須輪中排水機場等
参加費　10,000円
　　（会議のみの場合 2,000円）

事例発表者は、次の三氏です。

愛知県　日本モンキーセンター動物園
　　学芸員　水野　礼子氏
三重県　鳥羽水族館長　　中村　幸昭氏
岐阜県　高山屋台会館長　　谷田　　勉氏

既に申込みを締切りましたが、10月18日の研究協議．講演には余席がありますので、ご参加下さい。ご希望の方は、事務局にご連絡下さい。

編集後記

◦各館．園の貴重なご意見を基に、本年度の研修計画ができました。会員としての資質向上のため積極的にご参加を。

◦県内の岐博協未加入館．園が52程あります。事務局で加入案内を開始しました。口こみでもおすすめを。